

平成 30 年 5 月 1 日

京口門だより No. 55

明るい爽やかな 5 月となり、5 日は暦の上では立夏となります。屋外に出て風にあたるのも心地よく感じます。「五月来ぬ水に乗りゆく風の筋」(芹沢雪江)。

先月末に東京で日本東洋医学会の専門医を対象とした講演会が開かれました。私も講師として「日本漢方の独自性とその発展」というややこむずかしい話をしてきました。要するに、漢方というものは古い中国に生まれた医学ですが、日本独自の発展をして、今日では中国や韓国とも違った漢方になっていくとともに、日本で現在行われている医学の基礎を作ったであろうと、そういう話をしてきました。

ところで、私以外の講師のひとりで東大名誉教授島菌先生が、大変興味深い講演をなさいました。現代の生命科学、すなわちノーベル賞をとられた山中教授の iPS 細胞や人の受精卵である ES 細胞を用いた生命にかかわる科学研究には、大変重大な倫理的な問題点が含まれているという話です。iPS 細胞や ES 細胞はその中の遺伝子を扱うことによって、通常では見ることのできない生物を作り出すことができるということです。身近な例では、普通より大きな肉の多い魚や牛や豚を作ることが行われています。植物でも害虫がつきにくく、成長の早い植物を作ってゆくとか。そのような操作が行われています。

せいぜい 20 年前にイギリスでドーリーという人工羊が作られました。大変衝撃的な事件でした。人工的にわれわれ人間に都合の良い生物を作ってゆくことです。そうした研究は人以外の生物で行われていますが、将来的には人間そのものを、遺伝子操作によってより優れた能力を持ったものに作り変えとか、不都合な性質を持った人間を作らないようにするとか、人間の生命を人間が勝手にあやつるという時代が近いのではないかということです。

いつでしたか山中教授は iPS 細胞を用いた研究の中で、遺伝子操作によるそのような危険性があることを充分知らなければならないと言われていました。人間の都合によって生命を操作するのは、なんともおぞましいことと言えるでしょう。人間が第一でその他の生物はそれに従うものという考えは、日本や東洋のあらゆるものに命を認める考えとは相反するものでしょう。

とくに東洋医学は悪いものは取り除き、作り変えようとする現代医学とは、その姿勢が異なっています。

